

たかし あきら (さつき)

#1

新居。たかしとさつきの家。午前。あきは引越の手伝い。

あきら 「おつもないあー。」(段ボールを抱えて運び込んでいる)
たかし 「あ、それもそこらへんでー。」(段ボールを開け荷物を並べている)
あきら 「はいよー。(荷物を下ろす) だいたい、オレが貴重な休日を割いてま
で手伝うほど荷物多くないじゃんよ。」

たかし 「こんど飯おごるって言ったらノリノリで来たじゃん。」
あきら 「そりゃ親友の頼みだからなあー。(段ボールの中を物色中) お、これ
お前、大切なやつじゃん。」(一冊のノートを取り出す)
たかし 「ん？ああ、それだけはいつまでも大事にしないとね。」
あきら 「はあー、さつきちゃんかー。」
たかし 「なに感傷に浸ってんだよ。」
あきら 「そりゃ浸るだろうよ、たいして懐かしくもねえ、小4の夏だ。」
暗転。

#2

小学四年生の夏。

放課後。蝉の鳴き声。いつもの場所▽

あきら 「今日はたかしに見せたいものがあります。じゃーん。」
たかし 「なにそれ。『計算ドリル』？(クッキーを食べ始める)」
あきら 「うん。」

たかし 「どこで見つけたの。」

あきら 「昨日家に帰ったらランドセルに入ってたのさ。」

たかし 「ふーん。誰かのを間違えて持って帰っちゃったんじゃないの？」

あきら 「でもほらこれ、うちのクラスにメイなんてやつ居ないじゃん。」

たかし 「まあたしかに。」

あきら 「でね、中身これ算数の文章題の問題集みたいなんだけど、最初の方

パラパラ見てたら面白くて、ほら、ここ『たかしくんは9さいで、おにいさんは12さいです。としのさはいくつですか?』って。たかしの兄さんの歳は？」

たかし 「12歳だけど。」

あきら 「どう思う？」

たかし 「どうって、なにが。」

あきら 「いや、一緒じゃん？」

たかし 「たまたまでしょ。」

あきら 「そうかな？」

たかし 「そうだよ。」

あきら 「でもこれにはね、オレも出てくるんだ。ここ。『たかしくんはあめだまを2つ、あきらくんは3つもっています。ぜんぶであめだまはいくつありますか?』って。たかし今いくつ持ってる？」

たかし 「…2つ。」

あきら 「オレね、今ちようど3つ持ってるんだ。」

たかし 「え？」

あきら 「つまりね、たかし、これには現実が書かれてるんだ！」

たかし 「まさか。そんなこと、あるわけないでしょ。ただの問題集だよ。」

あきら 「でも、手書きだよこれ。」

たかし 「ほら、お母さん特製のドリルみたいな。字、綺麗だし。」

あきら 「にしたって、こんな偶然の一致あるか？」

たかし 「あるでしょ。だいたい突然出てきたそんなのがぼくらと何か関係あるほうが変だよ！」

あきら 「じゃあこれは? 『たかしくんはひろしくんからクッキーを2まいもらったので、ぜんぶで7まいになりました。もともとなんまいもっていたでしょう?』って。兄さんの名前、ひろしだよね。」

たかし 「それも、たまたまだろ。」
あきら 「いまクッキー何枚持つてる？」
たかし 「(袋から出して数える) …5枚。」
あきら 「きっと今日の夜にでも兄さんから2枚もらうぜ。」
たかし 「もし、もしもだけど、もしそうになったら、ぼくもその話を信じるよ。」
あきら 「へへ。楽しみだな。」

①チャイム。次の日。いつもの場所 田

あきら 「おっす、たかし！」
たかし 「2枚もらった。」
あきら 「ん？」
たかし 「クッキー！2枚もらったんだよ！」
あきら 「ほんとか？ビンゴだ！」
たかし 「ぼく、怖くなって昨日のうちにクッキーぜんぶ食べちゃったよ。」
あきら 「はは、虫歯になるぜ。」
たかし 「そのドリル、どうするのさ。」
あきら 「ふふーん。どうするもなにも、きっとこいつは『予言の書』だと思う。」
たかし 「なんだい、それ」
あきら 「オレがひと晩考えた結論によれば、きっとコレによって俺たちの運命は決められてるんだ。」
たかし 「うーん、バカバカしいけど、昨日信じるって言っちゃったからなあ…。」
あきら 「にひひ。」
たかし 「でも、だったとして、なんで文章題形式なのさ。」
あきら 「それは、オレにも分からないんだよな。きっとこのメイってひとの趣味だね。そもそもここに名前書いてはあるけどメイってのが本当にコレを作ったのかも謎だし。」
たかし 「なんだか嫌だなあ。『たかしくんは一生独身です』なんて書いてないだろうね？」
あきら 「そんな算数の問題があるかよ。」

たかし 「ちよつと貸してよ、先が気になる！」

あきら 「ダメだ！楽しみはとっておかないと。」

たかし 「なんだよ。」

あきら 「1日1問っていうルールにしよう。そうだ、ねえ、これ、こんどの夏休みの自由研究にしようよ。『予言の書』と過ごしてみた！」

たかし 「ユーチューバーかって。」

あきら 「はい、ということで、今日もさっそく『予言の書』を開いてみたいと思うんですけども！」

たかし 「ストップストップ。それはそれで楽しそうんだけど今回はナシ。」

あきら 「はい。」

あきら 『Q10.たかしくんの身長は○cmで、あきらくんはその□倍です。あきらくんの身長は何■ですか？』

たかし 「いままでたし算だったのに、いきなりかけ算。」

あきら 「ね。」

たかし 「しかもセンチとメートルで引っ掛けようとしてるイジワルな問題だ！」

あきら 「あるあるー！」

たかし 「まあ、○×□∥△■だろうね。合ってる？」

あきら 「おう、正解。ちよつと背比べしてみよっか。」

二人、背中合わせて背比べしようと歩み寄りながら

たかし 「ていうかぼくら小学生だよ？でかくない？」

あきら 「最近の小学生はこんくらいもギリギリいるでしょ。」

たかし 「そうかな。(うつむいて足元を揃え、いざ背比べと顔を上げると)

…あれ、さつきちゃんだ。」

あきら 「どれどれ。んくくく今日もかわいい。」

たかし 「なにしてるんだろぅねえ。」

あきら 「なにか…探しものっぽいな。」

たかし 「あ、行っちゃった。」

②チャイム。別の日。いつもの場所△

あきら 「おい、今日の席替え、ありやないぜ。」

たかし 「ふへへ。」

あきら 「なんでおまえがさつきちゃんの隣なんだよおお」

たかし 「クジで決まったんだし、公平でしょ？」

あきら 「いやズルい。給食を目の前で食べられるのが何よりもズルい！」

たかし 「へっへーだ。せいぜい遠くから羨ましそうに見てなつて。」

あきら 「くっそー。もうオレの友達は『予言の書』お前だけだ。でもこれで

今日の問題がクジの確率とかだったらオレ泣いちゃうぜ。」

たかし 「だいじょうぶ、確率は小学校じゃ習わないよ。」

あきら 「そういう問題じゃねえんだっつーの。はい。」

たかし 『Q12.ここに客席が□個あります。空いている席と埋まっている席の比は×:△です。空いている席はいくつでしょうか。/or/ここに○人お客さんがいます。男性と女性の比は×:△です。女性のお客さんは何人でしょうか？』

あきら 「こういうタイプもあんのか。」

たかし 「どうする？」

あきら 「っていうか、意味分かる？」

たかし 「なんとか。」

あきら 「じゃあ、数えてみつか。そっち半分はよろしく。」

二人、それぞれ客席に向かい、しばしお客さんを数える。

あきら 「どう。(コシヨコシヨ)」

たかし 「あ、うん、全部で○人で男性が…女性が…(コシヨコシヨ)」

あきら 「こっちはこんな感じだから…(コシヨコシヨ)」

二人 「合ってる！」

あきら 「演劇祭のスタッフに感謝だぜ。」

たかし 「なんか言った？」

あきら 「なんにも！」

③チャイム。別の日。セミの鳴き声。下校中。

あきら 「あちいー。」

たかし 「アイス買っていかない？」

あきら 「それ名案。レッツゴー。」

間。いつもの場所A

あきら 「ということで、二人でお金を出し合っつてのアイスを買ってきたわけですね。(アイスを舐めながら)」

たかし 「そうなります。(アイスを舐めながらドリルをばらり)」

たかし 『Q15.たかしくんとかきらくんは6本入りのアイスクリームを買いました。1日にそれぞれ1本ずつ食べるとすると、何日でなくなりますか?』

あきら 「6÷2＝3日だ。」

たかし 「うん、正解。」

あきら 「……」

たかし 「……」

あきら 「……もうすぐ夏休みだね。」

たかし 「……今年もラジオ体操とプールと宿題ですぐ終わるよ。」

あきら 「いや、『予言の書』がある。」

たかし 「はいはい。」

あきら 「なんだよ興味なさそうにして。」

たかし 「ぼくが興味あるのはさつきちゃんだけだよ。」

あきら 「さつきちゃんねえ。いいよね。」

たかし 「たいへん良い。」

あきら 「いつでも周りに友達がいて、」

たかし 「大好きなものはりんごとトトロ。」

あきら 「頭も良くてクイズが得意で。」

たかし 「眼はくりくり、髪もツヤツヤ。」

あきら 「それでいて誰にでも愛想が良い。」

たかし 「字も綺麗だし声もよく通る。」

あきら 「なんてったって笑顔がすてき。」

二人 「「いいよねえー!」(二人ともアイスでお互いを指す)」

二人 「あっ」

話に熱中している間にアイスがとけてしまい、この弾みで落ちてしまった。ひと通り落胆して、席に直る。

あきら 「……暑いね。」

たかし 「……うん。」

あきら 「……それさ、持って帰るあいだにとけちゃうよね？」
たかし 「……ちよつと待って。言いたいこと分かる」（残りのアイスも開封しながら）

あきら 「問題どおりにいかないことだつてあるのさー。（次のアイスペロペロ）」

⑤チャイム。次の日。いつもの場所B

あきら 「ねえたかし、オレ今日下痢なんだけど。」

たかし 「奇遇だね、ぼくもなんだ。思い当たるフシは……」

あきら 「やめよう。な、やめよう。オレたちはアイスがとけちゃう危機を救ったんだ。」

たかし 「ふふ、そうだね。あ、それで、ぼくママから『下痢に効くから』って紅茶を持たされたよ。」

あきら 「ちよつと分けてくれよ。」

たかし 「うん。」

あきら 「なにそれ？（たかしの”目盛りのある”ボトルを指しながら）」

たかし 「都合よく5目盛りあるボトル。しかも空の同じボトルがもう1本。」

あきら 「便利な世の中だなあ。」（たかしは紅茶を空のボトルに分けている）

あきら 『Q16.たかしくんは2／5Lの紅茶をさつきちゃんからもらいました。

1／5Lをあきらくんに分けてあげると、残りは何Lになりますか？』

あきら 「……」

たかし 「……」

あきら 「おい。」

たかし 「なに。」

たかし 『なに。』じゃねえだろお前！！とぼけやがって！嘘ついたなあ

……！！？！？しかも何だこの急展開！ちくしょう！おい！予言の書！

嘘だと言ってくれよおお！！」

たかし 「……答えは1／5Lだね。」

あきら 「答えなんかどうでもいいんだよ！」

たかし 「嘘ついたことは謝るよ！」

あきら 「説明しろよ！」

たかし 「ぼくが朝からあまりにもトイレに行くもんだから、さつきちゃんが

心配して紅茶を分けてくれたんだ。」
小芝居。

あきら 『たかしくん、お腹の調子わるいの…?』
たかし 『あ、さつきちゃん、そうなの、昨日アイス食べすぎて』(デレデレ)
あきら 『…よかったら、私の紅茶いらない?下痢には紅茶も効くんだよ。』
たかし 『そうなんだ!ありがとう!でも、カワイイ子が下痢なんて言葉、

口にしちゃダメだよ☆』

あきらがボトルでたかしの頭を全力で叩く

たかし 「いつてえー。」

あきら 「しかし、その優しさが、さつきちゃんらしくていいすなあ」

たかし 「でしょ?で、これがそのさつきちゃんがくれた紅茶です。」

あきら 「改めて依頼品を見てみよう。」(ME「なんでも鑑定団」)

たかし 「お味の予想は?」

あきら 「きつと、とっても「おいしい」です」

たかし 「鑑定は…!」(ME「1,10,100,千、万、…」二人は賞味中)

二人 「おいしい…!」

⑥チャイム。別の日。いつもの場所△

たかしはポテチを食べている。あきらはジャンプ(コロコロでも良い)を読んでいる。

たかし 「ふんふーん♪」

あきら 「今日たかし朝からテンション高くない?」

たかし 「ふふふ。今日はお母さんの誕生日だから夕飯は家族みなでお寿司なんだ♪」

あきら 「なんだい。それだけかよ。」

たかし 「うふ。回らないやつね。」

たかし、全身でくるくる回りながら喜びを表現中

あきら 「問題行くよー」

あきら 『Q19.さつきさんはたかしくんにラブレターを渡しました。1週間に1通渡すすると、たかしくんは1年間で何通のラブレターを受け取るでしょうか?』

あきら 「…」

たかし 「なにそれ。」

あきら 「…だからテンションが高かったのか…！」

たかし 「なんだよそれ、違うよ、そんなのもらってないよ。」

あきら 「うるせえ！『予言の書』にちゃんと書いてあるじゃねえか！」

たかし 「間違ってるよ！『予言の書』が！」

あきら 「そんなわけねえ！ランドセル見せてみろよ。」

たかし 「ちよつと、やめろよ。」

取っ組み合い。たかし敗れる。

あきら はたかしのランドセルの中身をひっくり返して調べだす。

手紙が出てくる。

あきら 「あるじゃねえか…！」

たかし 「…」

あきら 「おいたかし、さつきちゃんとの関係であーだこーだ言うつもりはねえけどな、嘘つくのはやめろよ。」

たかし 「…読んでみなよ。」

あきら 「え？」

たかし 「開けて読んでみなよ。」

あきら 「…（開けて読み始める）…（咳払い）…『お母さんへ。40回目のお誕生日おめでとう。いつも朝早く起きてお弁当つくってくれて』」

たかし 「恥ずかしいからもうやめてっ！」

あきら 「…これ…」

たかし 「9歳の少年が健気に綴ったママへの手紙だよ！」

あきら 「たかしごめん…オレてつきり…」

たかし 「いいよ。お寿司に免じて許してあげる。でも、『予言の書』最近調子おかしくなってきたくない？」

あきら 「そうだな、まえはさつきちゃんなんて出てこなかったし、今まで全部現実だった。」

⑦チャイム。次の日。いつもの場所B

たかし 「いよいよ明後日から夏休みだー！」

あきら 「いやっふー！テンション上がるー！」

たかし 「いやいや、むしろさつきちゃんを眺める機会が減っちゃうんだよ。」

あきら 「たーしかに。あ、そういえば今日珍しくさつきちゃんに話しかけられたよ。」

たかし 「なんて？」

あきら 『あきらくん、私の計算ドリル知らない？』って。けっこう前に失くして全然見当たらないんだって。夏休みの宿題もあるし、ないと困るよねー」

たかし 「ふーん。知らない人の計算ドリルならここにあるのにね。」

あきら 「なに言ってるんだ、これはメイってやつが書いた『予言の書』だぞ。」

たかし 「はいはい、そうでしたー。」

あきら 「そうだそうだ、『予言の書』よ！あしたの通知表の中身をひと足先に教えてくれ…！」

あきらが新しいページを開く。

二人でのぞき込むが、そこにはなにも書かれていない。

あきら 「あれ…」

たかし 「白紙だ…」

あきら 「おいおい、どうなっちゃうんだよオレたちの自由研究はー！」

たかし 「……あ、ちよっと待って。」

あきら 「なんだよー」

たかし 「なにか、なにか大事なこと見落としてる気がする。」

あきら 「白紙なんだから見落とすもなにもねえよー。」

たかし 「あきらちよつとうるさい。うーん、なんだろう…：：：そうだこれかな、あきら、『さつきちゃんのいいところ』ちようだい。」

あきら 「なんだっけそれ？」

たかし 「ほら、ちよつと前、アイス食べすぎてお腹壊した日の！」

あきら 「ああ、えーつとたしか、『いつも周りにたくさん友達がいて、』

たかし 『好きなものはりんごとトトロ。』

あきら 『頭も良くてクイズが得意。』

たかし 「ストップ。」

あきら 「なに。」

たかし 「なんだろう、あとちよつとで届きそうなんだけど…：もう一回。」

あきら 「『いつも周りにたくさん友達がいて、』」
たかし 「『好きなものはりんごととトロ。』これだ。」
あきら 「いいかげんにしろよ、なんなんだよ。」
たかし 「あきらには知らない？トロって、サツキとメイが出てくるんだよ。」
あきら 「知ってるよそのくらい。……………!？」
たかし 「言いたいことわかった？もう一回。」
あきら 「『いつも周りにたくさん友達がいて、』」
たかし 「『好きなものはりんごととトロ。』」
あきら 「『頭も良くてクイズが得意。』って、えええええ！？たしかにさつきちゃんも算数も得意だけど、」
たかし 「これ、メイってさつきちゃんの…ペンネームなんじゃない？」
あきら 「…じゃあ、さつきちゃんの言ってた計算ドリルって…これ？」
たかし 「…可能性はある。」
あきら 「で、でもこれさ、オレとたかしばかり出てくるし、めっちゃ詳しいじゃん。もし、もしこれがさつきちゃんだったとして、なんでもこんな…？」
たかし 「……………趣味？」
あきら 「えー。」

暗転。

廿三

新居。たかしとさつきの家。
あきらが卒業アルバムを眺めているところへたかしがアイスコーヒーを持ってくる。

たかし 「はいコーヒー。」
あきら 「おつ、サンキュ。」
二人、ゴクゴク。
あきら 「はー。結局、その次の日、終業式終わってからたかしは「ずっと前

に書いてただけど渡す勇気が出なくて…」って手紙渡されて、オレたちはドリルを返して。」

たかし 「人気者さつきちゃんのこと、問題づくりと妄想っていう妙な趣味はほかだけの秘密になった。」

あきら 「ほんと可愛いのに、変なシュミだよな。」

たかし 「人のヨメを悪く言うなよな。」

あきら 「かーっ。アホくさ。荷運びも終わったし、ぼちぼち帰るよ。」

たかし 「え、会っていかないの？」

あきら 「貴重な休日だって言っただろ。またいつでも会えるだろうし。」

たかし 「そっか、まあそうだね、手伝ってくれてありがとう。」

ピンポン。

たかし 「噂をすれば。」

あきら 「チッ。優等生はタイミングもいってか。」

たかし 「はは。あ、はいはい、いま開けるよ。」

たかしは鍵を開けに玄関に向かう。

あきらは身だしなみを整えグラスを片付けに向かう。

溶暗。

終。(カーテンコール:『さんぽ』)